

# 江戸風情を滞在型で

千葉県北東部に位置する香取市は、東西に貫く利根川の地の利に恵まれて江戸時代から商都として栄え、今も江戸風情にあふれている。利根川はかつて銚子と江戸を結ぶ水運路だった。市中心部の佐原地区から利根川に注ぐ小野川沿いは港で、商家の本店が軒を連ねていた。

ホテルはこの小野川沿いを中心とした1キ四方以内に宿泊棟10棟が点在し、そのほぼ中央にカフェ棟「GEISHO」、西端にフロント・レストラン棟「KAGURA」がある。それぞれの建物は町並みに溶け込み、教えられなければ宿だとは気づかないほど自然なたたずまいだ。

## くつろぎの宿

## 古民家改修 宿泊施設に



佐原の町並み。流れているのは小野川。川沿いの、江戸情緒の残る歴史的町並みを見ながら水上散歩の気分を味わう「小江戸さわら舟めぐり」の舟がのんびりと行く。カフェ棟「GEISHO」。1855年の創建で、今年2月まではフロント・レストラン棟だった。宿泊棟はここから少し離れて分散している

宿泊棟の名は「AOI」（母屋の1棟貸し・1部屋）▽「YATAI」（綿蔵など3棟・3部屋で構成）▽「GOKO」（資材蔵や母屋など3棟・4部屋で構成）▽「SEIGAKU」（質蔵、米蔵、書院の3棟・5部屋で構成）……。それぞれ香取市の市花「花苧蒲」にちなんで名付けられた。なぜ、このような奇抜なコンセプトのホテルが誕生

したのだろうか。その契機は10年前の東日本大震災だった。液状化や地盤沈下に見舞われ、激しく損壊したいくつもの古民家などは手つかずになった。また、佐原は成田空港から15キ圏内と近く、香取神宮や伝統的町並みなどの観光資源がありながら、客が長居してくれなかったのだ。観光まちづくり会社「ニッポニア サワラ」の小林博・取締役総務部長が振り返る。「観光客は年間50万人以上だが、大半は日帰りで滞在時間は2〜3時間。1人1日当たりの

観光消費額も5000円前後だった。朝、観光バスで来ても、お昼を食べる場所がなく成田や銚子に行ってしまう」

滞在して楽しめる観光地に転換し、観光消費を上げる……。この難題を解く鍵として浮上ったのが古民家などを借り上げて宿泊施設に改修する事業だった。資金面では、地元の京葉銀行や佐原信用金庫などが協力した。そして2018年3月、「佐原商家町ホテルNIPPONIA」がオープンする。

【近藤浩之、写真も】

